

都幾川会社社則

1881年

則社 會川幾都

明治14年

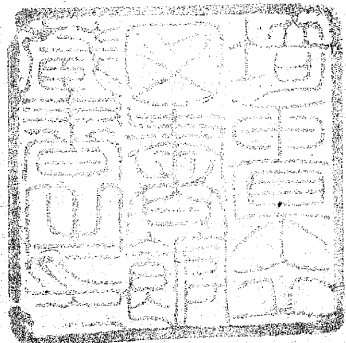
則社 會川幾都



L639
下

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

都幾川會社則



7286

都幾川會社設立願

我邦ノ生糸ハ海外輸出ノ要品ニシテ其利益アルヲ世人ノ
知ル處ナリ然ルニ此迄粗製濫造ノ弊害ヲ招キシヨリ諸洲
ニ聲價ヲ落セシテ豈惜ムヘキノ至リニ非ラスヤ依之今般
有志者ト協議シ私共發起トナリ一二ノ揚器械ヲ設置シ改
良法ヲ設ク競テ純良ノ生糸ヲ製造シ各自ノ利益ヲ謀リ
御國益ヲ擴張仕度別紙社則相添上申仕候間至急御認可被
成下度奉願候也

比企郡西平村

發起社員 峯岸茂三郎

同 郡玉川郷

同 高山忠三

同 郡五明村
 同 村田孝平
 同 郡本郷村
 同 岡野忠知
 同 郡日影村
 同 堀口至房
 同 郡玉川郷
 同 町田戌吉
 同 郡上古寺村
 同 松本與右衛門
 同 郡西平村
 同 大島金次郎

同 郡桃木村
 同 坂本倭一郎
 同 郡番匠村
 同 小室元貞
 同 郡田中村
 同 岡野為治
 同 郡同村
 同 柿沼嘉重

埼玉縣令白根多助殿

前書之通申出候ニ付與書捺印仕候也

比企郡西平村

戸長

明治十四年四月五日

峯岸茂三郎

同 郡玉川郷

戸長

町田 成吉

書面製糸都幾川會社設立願之趣者一般之會社條例
製定相成候迄別冊規則ヲ以テ人民相對施行候儀ト
可相心得事

印

明治十四年四月廿日

製 崎 玉

緒言

本邦生糸ハ海外需用ノ要品ニシテ其利萬貨ニ超越シ貿易
上ノ極點ヲ占ムルハ世人ノ知ル所ナリ然ルニ製糸ノ事ニ
至テハ舊習ニ安シテ改良ヲ忌ミ唯私利ヲ營マント欲シ粗
製濫造ノ弊害ヲ招キシヨリ歐米諸洲ノ市場ニ聲價ヲ落セ
シト豈惜ムヘキノ至リニ非スヤ茲ニ従前ノ座繰ヲ廢シ機
械製トナサンニハ其利多カルヘシト雖ヒ資金ヲ要スルノ
許多ナルニ依リ輒シ着手ヲナシ難キヲ如何セン今座繰系
ヲ改良シ一般精製ヲ本トシ絶線ハ一々之ヲ接續セシメ其
絲質均一ナルモノヲ捻造トナサハ器械製ニ讓ラザルノ價
格ヲ占メント疑ヲ入レサル所ナリ因テ有志者ト謀リ一二
ノ揚器械ヲ設ケ都幾川會社ト稱シ社範ヲ嚴ニ規則ヲ設

八
ケ協力奮起勉勵シテ遠クハ富國ノ義務ヲ盡シ近クハ同志
ト公益ヲ謀ラントス偏ニ望ム製糸篤志ノ諸君盡力アラシ
マラ

都幾川會社社則

當社ヲ設クル所以ノ旨趣ハ有志者協力シテ本邦第一ノ
物産タル生糸ノ興隆ヲ慮ルモノナレハ漸次分社ヲ設ク
ルノ目的ヲ以テ今茲ニ二ノ小器械ヲ設置シ古習ヲ去リ
改良法ヲ設ケ通常座繰糸ヲ緻密ニ検査シ捻造トシ各自
ノ利益ヲ謀リ御國益ヲ擴張セシムルノ方法ヲ立ル其條
目左ノ如シ

第壹章 本社期限及株券心得

第壹條 本社ヲ都幾川會社ト稱ス

但シ明治十四年埼玉縣武藏國比企郡西平村第二百三
十八番地ニ第一號都幾川會社同郡玉川郷第一百十八番
地ニ第二號都幾川會社ヲ假ニ設置ス

第二條 當社ノ期限ヲ五ヶ年トシ滿期後尙永讓ヲ謀ルルハ株主一同ノ協議ニ因ルヘシ

第三條 當社ノ資金ハ金六千圓ヲ以テ定額トシ株券ヲ發行シテ之ヲ募集シ其目的ヲ達シ之ヲ永遠ニ維持スルモノトス

第四條 株式金六千圓ヲ三百株ニ分テ金二十圓ヲ以テ一株ト定メ一名ニシテ數株數名ニシテ一株ヲ共有スルモ妨ケナシト雖モ株券附與スルハ一券ヲ以テ一株トシ之ヲ分割セサルモノトス

第五條 券面ハ必ス一名ヲ署名スルモノナルカ故數名ニシテ共有スルモノハ總代人一名ヲ記スヘシ

第六條 株券ハ何人ニ限ラズ讓渡ヲ得ルト雖トモ必ス株

券へ當社ノ裏書ヲ請フヘシ

第七條 前條ノ場合ニ於テ裏書ヲ請カ又ハ水火盜難ニ罹リ再ヒ券狀ヲ請求スル時ハ二人以上証印ノ書面へ手數金拾錢ヲ添テ當社へ差出ヘシ

第貳章 入退社

第八條 入社ヲ欲スルモノハ第一號書式ニ倣ヒ書面ヲ差出スヘシ不都合ナキニ於テハ社中協議ノ上之ヲ許スヘシ

第九條 入社ヲ許サル者ハ第二號証書ト株金ヲ差出シ本社ヨリハ第三號書式ノ券狀ヲ渡シ株金領収ノ証トシ併テ當社ノ株主タルヲ証スヘシ

第十條 年期中擅ニ退社スルヲ得ス強テ退社ヲ請フルハ

株主一同協議ノ上事實止ヲ得サルヲ認メ其請ヲ許ス可

但株金ヲ返戻スルノミニシテ益金ハ分與セサルモノトス

第拾壹條 事故ナキニ強テ退社スルモノハ益金ヲ分與セサルハ勿論満期ニ至ラサレハ株金返戻セサルモノトス

第三章 會社職務

第十二條 各自製造坐繰糸ノ揚返シヲ望ム者ハ社中社外ヲ問ハス申込次第揚返シ捻造ニ致シ渡スモノトス

第拾三條 前條揚返シ捻造手数料ハ小梓（蕪一舛ヲ挽タル梓）一個ニ付金一錢ヲ即時收入スルモノトス

但手数料ハ時宜ニ因リ増減アルヘシ

第拾四條 當會社へ各自製造生糸買上ゲヲ請フキハ相當ノ代價ヲ以テ買上ケ候事

第四章 會社損益

第拾五條 製糸賣上代價ハ諸役員ノ給料及社費ヲ悉皆引去純益金十分ノ九ヲ株數へ分配シ十分ノ一ヲ會社へ積置モノトス

第十六條 水火盜難及賣買上自然ノ失敗ニテ社損アルキハ株主一同ヨリ株數ニ應シ償フモノトス

第五章 役員撰舉及給料

第十七條 本社役員ハ互選投票ヲ以テ社中ヨリ撰舉ス可

第十八條 本社役員及人員

社長 一人

副社長 一人

検査役 二人

簿記計簿掛 二人

第十九條 役員ヲシテ事務ヲ分掌セシムルノ前條ノ如シ
ト雖モ當分ノ間ハ一名ニモテ二三役ヲ兼勤スルモ妨ケ
ナシトス

第二十條 役員給料

社長 月給金七圓

副社長 同 金六圓

検査役以下金六圓ヨリ不多金四圓ヨリ不少巧拙ニ
因リ給與スルモノトス

第廿一條 社長以下旅費ハ二里以内ハ無給二里以外五里
以内ハ金三十錢五里以外金五十錢滞在ハ金五十錢ヲ給
與ス

第廿二條 傭工夫女給料等ハ正副社長ニ於テ至當ニ決定
スヘシ

第廿三條 役員ノ勤務ハ一ケ年ヲ限り毎年四月ニ改撰ス
可シ

但改撰ノ際前勤ノ者ヲ再撰スルモ妨ケナシ

第六章 役員事務章程

第廿四條 社長事務章程

第一節 會社ノ利害得失ニ注意シ諸役員ノ勤惰ヲ監督
スヘシ

第二節 社内外ヲ不問粗惡ノ製糸ヲナス者アルキハ其製糸者ヲシテ懇諭改其セシム可シ

第三節 生糸販賣價格表及株主集會ノ期日又ハ入社人ノ住所姓名等ヲ社中ニ報告シ又ハ生糸相場高低アル時ハ遲遠ナク其由ヲ報知スヘシ

第四節 社務上不都合ヲ見認改正或ハ廢止セント欲スルカ又ハ新ニ一事ヲ起サント欲スル等渾テ計算上ニ影響ヲ及ホス事件等有之節ハ社中へ報告ス可シ

第五節 簿記計算掛ヨリ差出シタル年月表ヲ社中一般へ報告スヘシ

第廿五條 副社長事務章程

社長ヲ補助シ社務ヲ調理シ社長不在ノ時ハ其任ニ代

ルモノトス

第廿六條 検査役事務章程

各製造人ヨリ差出セシ製糸ヲ本社ニテ揚返シ其等級ヲ定メ簿記計算掛へ相渡スモノトス

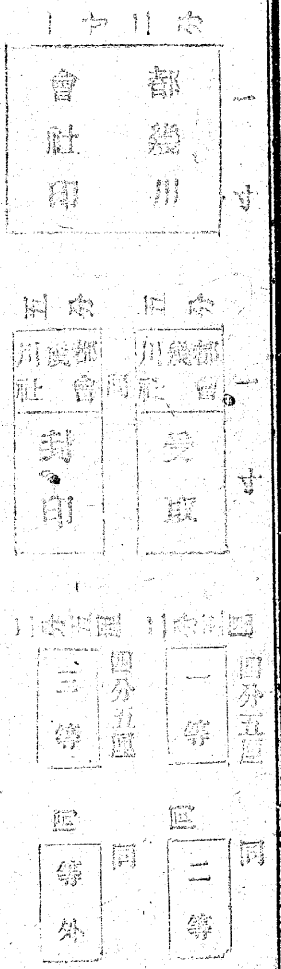
第廿七條 簿記計算掛事務章程

社長副社長ノ事務ヲ受繼キ金員物品ノ出納ヲ帳簿ニ詳記シ金員物品ノ出納ヲ主リ年月表ヲ製シ社長へ差出スヲ責任トス

第七章

第廿八條 印影及商票

商票



第廿九條 當社ニ備フル帳簿左ノ如シ

會社株式帳 製糸買上帳

出納帳 受附番號帳

製糸賣上帳 製糸検査帳

日誌

第八章 品位區別

第三十條 品位區別テドロノ儀左ニ掲クルト雖トモ需用

人ノ好不好ニ應シ變更スルモノナレハ之ヲ豫定スル能ハステドロノ適度ハ時々報告スルモノトス

第一等 節及細大不同ナクテドロ十四十五十六ニ揚リ光澤最モ美麗ナルモノ

第二等 節及細大不同ナクテドロ十四十五十六ニ揚ルト雖モ光澤薄キモノ

第三等 テドロ十三十七ニシテ光澤二等ニ亞クモノ

等外 テドロ定マラス節及細大アルモノニシテ光澤ナキモノハ内國用ニ充ツ

第九章 會議

第三十一條 會議ヲ定例臨時ノ二種ニ區別シ定例會ハ每

年四月ニ開キ社員一同集會シ生糸賣買其他一切ノ事ヲ
議ス臨時會ハ社長及役員三名以上ノ發意ニヨリ非常ノ
事ヲ議センカタメ開クモノトス

第三十二條 毎年四月定例會ニ於テ前年ノ役員ヲ改撰ス
ルモノトス最期日ハ其時々社長ヨリ報告スヘシ

第十章 賞罰

第三十三條 社員職務上超衆ノ勉勵アルモノハ其賞ト
シテ金三圓以下ノ賞ヲ與フ可シ

第三十四條 社員ノ私曲ヲ以テ會社ノ損失ヲ來スモノハ
損失ヲ償ハシメ其職ヲ退ク可シ

第三十五條 第三十二條ノ賞金ハ會社ノ雜費中ヨリ支出ス
モノトス

第一號書式

入社要求書

一 社資幾株

右ハ私儀御社へ被差加度候也

郡村番地

年月日

何之誰印

都幾川會社御中

第二號書式

証

一金何圓

但幾株

今般前書株金差入レ入社仕候ニ付テハ社則堅ク可相守萬
一違犯候節ハ社則ニ因リ御取計ヒ相成候共聊違背申間敷

依テ右株金並証書差入置候事

郡村番地

株主

年月日

何之誰印

前書之通相違無之候萬一不都合有之節ハ証人ニ於テ一切引受可申依テ保証如件

郡村番地

保証人

年月日

何之誰印

都幾川會社御中

第三號書式

株券

一此券ヲ以テ當社ノ株
 有スルヲ以テ當社ノ株
 テ當社ノ株
 主タルヲ以テ當社ノ株
 シ會社ノ純
 益金ノ配賦
 ナナスモノ
 トス
 一火災ニ罹
 リ又ハ盜難
 ニ因リ紛失
 ナルキハ其
 事由ヲ詳記
 シ二名以上
 ノ連署アル
 証書差出シ
 當社へ再與
 ナ請フヘシ

--	--	--	--

株券之証
 郡村番地
 株主
 何之誰
 一金二十圓
 右入社株金預リ候處實正也
 本社滿期ニ至リ此券引換ニ
 本書ノ株金可致返却候後証
 如件
 年月日 都幾川會社
 同社々長何之誰
 同副社長何之誰

